

## Cさんのケース

Cさん(女性)は、1943(昭和18)年、北海道生まれ(聞き取り時点で60歳)。1951(昭和26)年12月、保健所の職員が来て父親を連れて行き、家は「真っ白になるほど」の「消毒」を受ける。ハンセン病にかかった父親が、松丘保養園に強制収容されたのだ。母親は職場をクビになり、小学校2年生のCさんも学校でいじめられるようになる。

17歳で結婚。夫を松丘保養園に連れて行き、入所している父親に会わせた。はじめは態度に変化のなかった夫だが、しだいに、アルコールがはいると、ハンセン病の父親のことを持ち出しながら、Cさんに「暴力」をふるうようになる。Cさんは、約20年間ドメスティック・バイオレンスを耐え、子どもの成人をまって離婚した。現在は北陸地方に住む。

### 父親が強制収容、家を「真っ白になるほど」消毒された

Cさんは一人っ子。もの心ついたときには、父親は、すでにハンセン病にかかっていたという。「目は、半分ぐらい見えなかった、どっちも。その頃から両目、悪かった」。父親は家の中で「寝たり起きたり、ブラブラ」している状態で、一家の生活は、母親が「近所の工場(こうば)へ行ったりとか、そういう仕事」で支えていたと記憶している。

《Cさん》父親が働いてる姿は見たことない。つねに母親を叱ってる。ちょっと遅くなれば、「遅い。早くご飯食べさせろ」とか。そういうことしか、父親のイメージとして残ってないです。

父親が松丘保養園に強制収容されたのは、Cさんが8歳の冬だ(1951年12月)。Cさんは、父親が連れて行かれるときのことを覚えている。

《Cさん》保健所の方が、ドドドッと何人かで来て、父親を連れて[行った]。そのあとは、消毒。部屋のなか、真っ白になるほど、消毒されました。そしてあとは、父親の着ているものとか、寝てる布団とか、ああいう物はみんな山のほうへ持って行って燃しちゃった。

いったん母親は、青森[の松丘保養園]まで送ってったんです、父親を。父親の弟とね。そのとき一緒に、女の人が2人、父親が1人、[ぜんぶで]3人、1つの列車の箱に入れられて。そして、わたしは見てないからわからないんだけど、らいの、なんかこう、書いた……

《聞き手》「伝染病患者護送中」とかって？

《Cさん》なんかそんなの書いて、連れて行かれたっていう話なんです。

こうした、「ハンセン病である」ことを周囲に知らしめるような強制収容、消毒があった

ことによって、周囲の、Cさんの家にたいする態度は、一変してしまう。

《Cさん》それまでは、まわりの人はあんまり偏見の目では見てなかったんですよ。けっこう近所付き合いもあったし。友達とも遊べたし、「遊ぶな」とも、誰も言わなかったですよ。それが、〔保健所の人〕来てからはもうダメでした。近所の人も来なくなり、学校行ってもやっぱり、いじめられるほうが多かった。小学校2年だったと思う。すごくもう、それだけは一生忘れないね。真っ白になりましたもん。

《Cさん》父親が連れて行かれてからはもう、村にいるのが嫌、学校へ行くのも嫌、っていう日々がつねに続いてました。母親が仕事がクビになる。生活が苦しくなる。そのつど、母親は、「死のう、死のう、死のう」って。母親もやっぱり、小さいわたしを抱えてこれから先どうしたらいいかっていうことが頭にあるからね。だから「死のう、死のう」って、どれだけ言われたかわからない。

この当時のCさんは、「父親がらい病で、うつるために連れてかれたっていうの、はっきりわかっていない」状況だったという。

《Cさん》なんでこういうふうにいじめられるのか、なんでこんなに消毒されるのかって、不安な気持ちがいっぱいだった。だんだんおっきくなってからはね、「そういうらい病っていうのがあって」っていうのは聞いたんだけど。母親は、あんまり説明してくれてないです、わたしには。かわいそうだと思ったのかな。自分の子だから、余計。だから、ぜんぜん説明はなかったですね、母親からは。

### 学校に行くのが「嫌で嫌で」

父親が強制収容される以前は、近所の子もたちと「連れ立って」学校に行っていたCさん。「でも、それからもう、ひとりぼっち。ぜんぜん近寄ってこなかった」。

《聞き手》なんか言われる？ どういうふうに言われるの？

《Cさん》やっぱり、「そばへ来ると病気がうつる」って。わたしのそばへ行くと「病気がうつるから、そば行くな」。学校行っても、ひとりだけポツンと。だいたい、端っこのほうへ行ってるほうが多かった。授業が始まれば席に座るけども、あとはみんなが遊んでるころ、ひとりでポツツと部屋の隅にいるとか、そういう感じ。学校へ行くのが嫌だったんですよ。つねに嫌で嫌で。

《Cさん》なにせ、学校は行きたくなかったですね。もう口では言えないほど。当番で掃除をして、わたしがそのへんを拭いてると、「そんなぁ、ダメだ」とかね。雑巾

を投げられて、ぶつけられたりね。そういういじめをすごくされましたね。だから早く大きくなって、違うところへ行って、早く結婚しようという意識がずっとあったんです。中学生になってから、もう、そういうことしか考えてなかったですね。

《聞き手》中学校のときも、いじめってというか、友達ができない？ ずうっとおなじ？  
《Cさん》同じですね。

《聞き手》先生も、なにもしてくれない？

《Cさん》なんにもしてくれなかったです。

《聞き手》先生は知ってたわけ？

《Cさん》知ってると思いますよ。なんにも言わなかったですけど。

学校のなかで、Cさんの味方になってくれるひとは、いなかったようだ。先生については、「なんだかんだ〔差別的なことを〕言われたって記憶はいっさいない」かわりに、「いいところもない。かばってくれたってイメージもない」。さらに、Cさんの語りからは、教師の「配慮のなさ」がうかがえる。

《Cさん》嫌だったのが、生活保護みたいなかたちで、教科書をもらうんです。いまはみんな、ただでもらうけど、あの頃は買ったもんでね。で、買えない人はお古を安く譲ってもらったりってということもあった。だけど、わたしには、もらえたんですよ、どういうわけか。そうすると、それがまた、変な目で見られる。「なんで、おまえだけ、もらえるんだ」って言われるんです。それもまた、嫌あでね。「本ももらったりすると、みんなにいじめられるから嫌だ」って言って泣いたことがあるんです、母親に。よけい、学校行くのが嫌だった。

《聞き手》他の子にわかるようにくれたわけ？

《Cさん》そうそう。教室でくれるんですよ。そうすると、貧乏で、お古使ってる子もいるのに、なんでもらうんだっていうね。やっぱり、父親がハンセン病だったから、そういう関係で、もらうことができたんだらうと思ったけど。

「学校に行くのが嫌」な状況においこまれたCさんは、あまり学校に行かなくなった。「中学校なんか、やっと卒業できるぐらい」。そのころ、Cさんの母親は、「行商して、うちにいなかった」。さらに、生活していくために、Cさん自身が、母親の仕事を手伝わなければならない状況があった。

《聞き手》〔お母さんは〕なんの行商したの？

《Cさん》サンマってあるでしょ。あれ、冷凍したのが箱に詰まってるんです。それを解凍して、さばいて、ちょっと干して、市場へ売りに行く。あとは、山へ行くと、北海道のほうって、落(ふき)がちょっと太い。それを採ってきて、茹でて、皮をむい

て、それをまた、「一把いくら」とか。そういうふう加工して、市場へ売りに行く。露天みたいに、並んで売ることができたんです。その頃、いっぱいそういう人がいたんですよ。

〔母は〕朝早く行くんです。だから、わたしもちょっと大きくなってからは、冷凍溶かしたりとか、蕎麦の皮むきとか、手伝いましたもん。小学校の頃から、やりました。そうすると、学校もやっぱりサボるようになるし。実際、学校は行きたくなかったですね。

《Cさん》母親はもう、そうとう苦労した。なんべんも「ふたりで死のう」って言って。ご飯を食べられないですもん。働いて、金取ってこないと、ご飯食べられないわけ。風邪ひいたりとかなんかして、寝るでしょ。すると、食べないで、寝てるだけだったんです。だから、学校なんて、中学校なんか、やっと卒業できるくらい行ったくらいじゃないの。母親を手伝うほうが、いっぱいでしたからね。

あれが消毒でもなんにもされなければ、偏見の目もないし、そのまんまでいれたんだと思います。だって、消毒される前は、なんともなかったんですからね。〔消毒〕しないで、黙って連れて行けば、“病気だから、どっかの病院に保健所の人が連れてったんだなあ”って思うぐらいで、よかったんだろうけど。

### 母に連れられ松丘保養園へ

母親に連れられて、松丘保養園の父親のもとをたずねることが、「1年に2回とか3回とか」あった。Cさんは、その頃のように話を語っている。

《Cさん》あそこにも、学校があったんですよ。小学校と中学校だけ。その頃、子どもさんもいっぱいいたんです。子どもさん自体が、病気なんです。“こりゃあ、この学校へどうして入れないのかなあ”って、つねに思って。母親にも、なんべんも言いました、「この学校へ入りたい」って。その学校行くと、わたしより、みんな大きい人ばっかだったもんで、かわいがってもくれるし。誰も、病気がうつるとか、そういう話はまったくくないわけです。「父親がここにいるんだから、この学校に入れてもいいはずなのに、なんで入れないの？」って、母親になんべんも聞きました。

《聞き手》だけど、松丘へ行けば、病気の状態がひどい人もいっぱい見たでしょ？それは、びっくりしなかった？

《Cさん》びっくりしました。お菓子もらっても、食べれなかった。自分の父親からでも、「なんか食べれ」とかって言われても、父親のそばでは食べれなかった、まったく。患者さんがいないところでは食べれたけども。

《聞き手》「うつる」という感覚？

《Cさん》〔そうじゃなくて〕「怖い」って。気持ちが悪いっていうと、ちょっと言葉が

悪いかもしれないけど。「うつる」という感覚は、いっさいもったことない。

松丘保養園っていうのは、同じほうから来てる人がたは、「北海道道民会」とかって、どこでもあるんだらうと思うんですが、世話してくれる人がいるんです。弱い人を、病院のなかで。それで、うちの父親も面倒みてもらってる人がいて。その人の奥さんって人が、まったく患者さんじゃないみたいだったんですよ。もう、どこが悪いかわからない。患者じゃないんじゃないかって言われるぐらいね。だから、その人のそばでは食べられる。うつるとかなんか、偏見をもってるわけじゃないんだけど、なんか、無意識に食べられないんです。

だから、父親がこういう病気になってから、父親のどっかをさすってやったとか、ぜんぜんないんです、わたし。父親もね、わたしに対して、そういうことをしてくれとか〔言わなかった〕……。ご飯を食べたあと、「器をあそこへ置いてきてくれ」ということはあったけど、それ以外のことは、いっさい要求しなかった。「背中が苦しいからさすってくれ」とか、大人になってからでも、ない。

《聞き手》お父さんのほうが、「うつる」と感じに思ってたかもしれないね？

《Cさん》一回、子どものとき、検査されました、わたし。松丘保養園で。体に、湿疹みたいにいっぱいブツブツができて。それで、「検査したほうがいいんじゃないか」と言われて。したことあります。

《聞き手》それ、いくつのとき？

《Cさん》まだ小学生だな。よく記憶ないけど、検査はされた。もう、あの頃はいっぱいいたから、そういうふうに検査される〔人たち〕……。それに、〔療養所のなかへ〕入るのも厳しかった。いちいち、消毒。入ってくるのに門番がいて。門番を通さなければ、中へ入れなかったです。

## 17 歳で結婚、夫の暴力

中学卒業後すぐに、Cさんは、生まれ育った地を離れた。「そこにいるのが嫌だった」。知り合いのつてを頼りに、15歳で働き始める。「夜の仕事。なかのほうの、お皿洗ったりとか」。

1961（昭和36）年、職場で知り合った男性と「17歳と何ヵ月で結婚」する。相手は20歳。「まだ若い」ということで、相手方の親からは反対されたが、押し切って結婚した。「主人も半分グレてるほうだったし、わたしも、反発を持ってる時期だった。親の言うことなんて、ぜんぜん聞いてなかった。それで所帯を持って」。

《Cさん》その時点ではもうね、父親のことは主人に話してあったんです、わたしは。

《聞き手》どういう話し方をしたんですか？

《Cさん》「青森の病院に、らい病っていう病気で入院してる」と。その頃はもう、わたし自身が、「らいだ」というのは知ってたので。「いっぺん、行ってもらえる？」って言ったら、「行ってもいいよ」ということで、会いに行ったんです。結婚してから、

ふたりで。父親は、最初「会わない」って言ったんだけど、でも「せっかく来てくれたんだから、ちょっとだけでも会ってもらえる？」って言って。会ってくれたんです。

《聞き手》会ってもべつに、おつれあいの気持ちが変になったとあって、そういうことはないのね？

《Cさん》すぐは、ならなかったですね。

《聞き手》あとから微妙に出てくる？

《Cさん》少しずつ。やっぱり、お酒を飲むと出るんですよね。ちょっと酒乱気(しゅらんげ)があったもんで。飲んでないときはいい人でしたけど、飲むともう、わからなくなる。だんだんだんだん、暴力とかそういうものがエスカレートしていった。だけど、その頃まだ、わたしも年が若いし。頼ってるのが主人ばかりだったもんだから、“どんなにされても、ついていかなくちゃダメだ”っていう頭でいたんです。わたし自身、父親がいないで育ったから。

籍を入れた翌年には長男が生まれ、5年後には次男が生まれている。Cさんは「子どもの親をなくすのは悪いと思って、〔夫の暴力を〕ずうっと我慢してた」という。

《聞き手》飲んで、どういう言い方をするんですか？

《Cさん》要するに、肩身が狭いってことでしょうね。なんか、そういう病気の〔父がいる〕妻をもらったっていうふうに、とるんじゃないんですか。はっきりとは言わないんだけど、そういう言い方をしてました。気の小さい人だから、普段は出せないのが、飲むとガーッと出てくる。ふだん抑えてることが。

《聞き手》いまでいう、ドメスティック・バイオレンス？

《Cさん》かなりひどいですよ。前歯みんな、叩かれて、折れたんです。もう、すごい。

子どもの世話を手伝うため、母親が来て、一緒に住んでいる時期があった。そのとき、夫は「母親が隣に寝てても、わたしをいじめる」。でも、「母親は絶対、仲裁に入らなかった」。

《Cさん》だから、すごく母親を恨んだ。娘がこんなにいじめられてるのに、なんで、とめに入ってくれないんだ、と。まして、父親のことを問題にして、いじめてるのに。だんだん母親も弱ってきてから、聞いたら、母親は「なかに入りたくてしょうがなかった。だけど、自分が入ってとめると、もっとひどくなるから、我慢した」って。それ聞いたとき、やっと納得したけど。それまでは、ものすごく母親を恨みました。

子どもが20歳になったとき、Cさんは離婚。「3年ぐらい別居してから、長男が主人と話

して。籍を抜いてきてくれた。」

### 仕事を見つけるのに苦労

Cさんは、離婚前から働いていたが、仕事を見つけるのには苦労を重ねたという。病気の父親のことを言えなかったり、「学校を出てない」ことがあったりして、「パートじゃなかったら勤められなかった。」

《Cさん》しっかりしたところへいこうとすると、履歴書というものが必要になってくる。やっぱり、生まれやらいろいろ、ちゃんと書かなくちゃダメ。それがやっぱり、書くことができなかった。学校も出てないし。

〔それでも〕社会保険と厚生年金があるところに、ちょっとだけ勤めたんです。その料理屋の仲居さんの場合は、履歴書とか、そういうのはいらなかった。だから、簡単に入れたんです。

《聞き手》でも、家族構成なんかは、結婚後の家族のほうだけを書けばいいんですよね？ だからもう、お父さんのことは……？

《Cさん》それでも、やっぱり聞かれました、面接で。「父親はなにを仕事してますか？」とか。一回そういうことがあったら、もうそれが嫌で。それから、そういうところへは行かないって、自分で決めました。

《聞き手》そのときは「病院に入院してる」とかって答えた？

《Cさん》いや、「死にました」って。つねに「死んだ、死んだ」って言っていました。

北陸地方へ引越し、料理屋で働き始める28歳前後の頃から、ようやく、父親が「青森の病院にいる、と話せるようになった。」それでも、従業員同士の会話で「なんで〔お父さんは〕青森に行ってるの？」と聞かれると、「この病気で、とは言えない。」

《Cさん》職場でわかったらどうしようっていう不安が、すごくあった。年に2回は〔父親を見舞いに〕青森へ行くっていうのに、「なんで青森行くの？」って、つねに聞かれて。職場を休んで行くわけですからね。

《聞き手》その職場っていうのは、なんの？

《Cさん》パチンコ屋さん。〔料理屋さんは〕潰れてしまったので、それでパチンコ屋さんへ行ったんです。〔仕事は〕換金所。2人でやってたもんだから、ひとりが休むと、朝の9時から夜の11時まで、椅子に腰掛けて……。おしっこしに行くときだけ。あと、15分の休憩があるだけ。つらかったですね。

《聞き手》「なんで青森に行くの？」って言われたときには、どうやって答えるんですか？

《Cさん》「父親がいる」と言いましたよ。「目が悪くなって。青森に、裕福な親戚の人

がいて、そこにいい病院もあったから」って。

### 嫁たちには父に会わせなかった

Cさんは、2人の息子たちが小さい頃から、松丘保養園に連れて行っている。また、Cさんの母親も、子どもたちを「年に2回ずつぐらい、なんべんも」連れて行っていた。面とむかって話したことはないが、「子どもたちは自然に、そんなもんだと思って受け止めて」いるようだという。

現在、息子たちは2人とも結婚している。息子の妻たちは、Cさんの父親のことを「知っている」という。

《Cさん》〔息子たちは、自分が自然に知ったように〕そのままきっと、嫁さんに話したんじゃないかと思う。わたしの口からは、「こうだ」っていうことはいっさい嫁には言っていない。だから、〔嫁のほうからは〕なんの抵抗もないです。

〔ただ〕父親には会ってないです、嫁は。長男の嫁も次男の嫁も、父親が生きてるうちに結婚してるから、「一回は行きたい」って言ったけど、わたしはいっさい嫌だと言って、反対して。連れて行かなかった。

《聞き手》なんで？

《Cさん》見せたくなかった。やっぱり、見せないほうがいいと思いました。わたし自身のプライドなのかな。それで、見せたくなかった。嫁さんが見たからって、わたしの旦那みたいに離婚していくとか、そういうのではないと思ったけど、万が一あれば、わたしの責任になる。見せたいとは思わなかったですね。

長男の嫁はとくに「行く、行く」と言いました。なぜかっていうと、うちの父親は変わった人でね、せがれの子どもに、物を送ってよこすんです。病院に入院すると、電化製品とかもらうんですよ、1年に1回。〔以前は〕毎年ラジオ〔だったけど、最近〕ビデオだとか、テレビだとか、そういうものを送ってよこしたんです。だから嫁さんが、よけい、「お礼を言いたいから連れてって」って。〔でも自分は〕「いいよ、行かなくても。わたしが言っとくから」って。それはしなかったですね。

国賠訴訟によって、このハンセン病問題がテレビで「毎日のように」放送された一時期、Cさんは、かえって「不安が募った」と語る。職場などの身近な人間関係のなかで、ハンセン病にたいする偏見が、おもてに現れてくるからだ。

《Cさん》それまでは、ハンセン病なんていうのは、一般社会では知られてなかったですよ。昔の人は「らい病は、隔離されて、うつる病気」っていうのは知ってても、あれほど顔や手が変形するとは、誰も思っていないですもん。実際、見ない限りは。

ところが、この問題が起きて、テレビに出るようになると。職場で、昼休みなんか

テレビを見てると、「いやあ、あんな人が家庭にいたらどうなんだろうね？」って、へいちゃらで言う人が、いっぱいいる。そういうときの気持ちっていったら、なんとも言えないです。実際、自分がそうだから。「そんなこと言ったって、やっぱり、家族の人だって苦労してるんだわ。本人たち、なりたくてなったわけじゃないんだから、そんなこと言わないほうがいいんじゃない？」っていうぐらいは言えたけど、そのときの気持ちはもう、言葉では表せない。もう、つねにそういうことはありました。

### わたしも父を恨んだ

Cさんの父親が亡くなったのは2001年の冬、「裁判が決まる3ヵ月ぐらい前」のことだ。父親は、裁判の原告にはなっていない。「父親の口からは、裁判って言葉はなかった」のだが、「どこから聞いてたのか」療養所の統廃合について心配していて、「『そうになったら死ぬ』って、つねに」言っていたという。父親は、療養所の外の世界にたいする不安を、強くもっていたようだ。

《Cさん》うちの父親が転んで骨折して、青森の県立病院に入院して、手術したんです。あそこ〔＝松丘保養園〕ではできないもんでね。われわれみたいに〔療養所の外で〕暮らしてる人がたのことを、「社会」っていうんですよ、青森の〔松丘保養園の〕人がたは、「社会の病院」「社会の病院」っていうんですけど、その〔県立〕病院に入院したときも、「嫌だ、嫌だ。社会の病院にいるのは嫌だから、松丘保養園へ帰りたい、帰りたい」って言ってました。50年もいるから、もう、よそへは出れないんですよ。

《聞き手》外の、社会のほうの目が気になったんでしょうね？

《Cさん》そう。保養園からちゃんと、付添いの人が行くんですけど。それでもやっぱり「嫌だ、嫌だ」って言ってましたね。

Cさんは、父親とは生前「喧嘩ばかり」だったという。父親がハンセン病であることを理由に、「いじめ」や、夫からの暴力を受けてきたCさんは、そのかなしみや怒りを、父親にぶつけたのだ。

《Cさん》わたしもやっぱり、Bさんと一緒でね。一時、父親を恨んだんです。いま、いちばん後悔をしてるのは、父親に、恨んで、もう喧嘩ばかりして〔たこと〕。父親と会って、いつも喧嘩ばかりして。

《聞き手》いつ頃、それは？

《Cさん》父親が亡くなる、5年ぐらい前まで。

《聞き手》いつから？

《Cさん》ずうっと。「あんたがそういう病気になってるから、わたしが苦労するんだ」って、よう言ってました。

《聞き手》中学生の頃も？

《Cさん》いや、子どものときは言ってないです。大人になってから。だから、主人に言われ出してからは、吐き出すところがないから、やっぱり、父親に言いました。「あんたのためにいじめられる」とか。父親は、それに対してなんにも言えない。きつい人だったから、謝りもしなかったし。「おまえが好きで結婚したんだろ」って、そういう言い方しかなかったです。

父親にたいして、「“親のくせに、なんで、なんにもしてくれないんだ”っていう頭が取れなかった」というCさん。その気持ちが変わったのは、父親が倒れ、手術して「寝たきり」の状態になってからだ。

《Cさん》その前までは、目が見えなくても、自分の用ぐらいはできたの。自分の部屋をもらって、ベッドに寝てるんだけど、長靴を履いてベッドから下りて、歩いていって。手でこう〔便器に〕触って、おしっことか、それぐらいはちゃんとできた。きれいに洗える設備もあったから、できたんです。

でも、寝たきりになってしまって。下剤を飲まされて、便が少しずつ出ると、そのつど職員の人を取ってもらわなくちゃならない。それが嫌で。「もう死にたいから、死ぬ方法を考えてくれ」とか、そういうことばかり言うようになったんです、父親が。だから、そんなに恨んでたあれ〔=気持ち〕が、父親に反発してもかわいそうだな、って思うようになって。こんなになってまでも、わたしが反発したらかわいそうだな、と。行くたびに、「そんなの気にしなくても、職員の人はその仕事なんだから。遠慮しないで取ってもらいなさい」って言うんだけど、「嫌だ、嫌だ」って。出た感じがわかるのと、わからないときがあるみたいで、何回も出ると、職員の人、その人によって怒る人もいる。「すぐ教えない」とかって言って。やっぱりそういうのが「嫌だ、嫌だ」って、つねに言うようになって。

亡くなる3年ぐらい前から、わたしが行って、「帰る」って言うと、泣くようになったんです。涙も〔流す〕。いままで涙なんてこぼしたことはない。〔それまでは〕帰るときになると「もう絶対来ない」って言って帰るんです、いつも。そうすると「あぁ、もう来なくていい」って、相手も。でも、また行くんですけど。そこは親子なんだけど。そういう状態の繰り返しだったんだけど、泣くようになった。「これは、もうダメかもなぁ」って感じたんです。だから、優しくしようという気持ちが、そのときに起きて。いままで反発しすぎたかなっていうか。

亡くなるまえ、松丘保養園の園長からも「長くはない。覚悟しておいてください」と言われていたという。父親の「死に目は会えなかった。死んでからの連絡だった」。

松丘保養園で「簡単に」告別式をしたあと、父親の遺骨をもって帰り、母親の遺骨とい

っしょにお墓に入れた。

《Cさん》〔松丘保養園の告別式では〕道民会とか、盲人会の人々が、大勢来てくれた。焼き場へみんな行ってきて、あっちのしきたりでやってもらって。お寺さんも頼んで、拜んでもらった。

そして、〔お骨を〕連れて帰ってきたんです。こっちでも、一応〔告別式をした〕。親戚なんかなにもないので、子どもとか、ちょっと知ってる人で。お寺さんには、母親が死んだ時点で、「父親も長くない。亡くなったらその時点でお墓をつくって、母親と一緒に入れたい」と言って、ずっと母親〔のお骨〕を預かって〔もらって〕いたんです。父親のお骨を持ってきて、お墓をつくって。そのとき、初めて一緒に入れたんです。入れるときに、「50年も離れ離れでいたからね、やっと一緒に入れたね」と言って、話しながら入れた。まあ、わたしも苦労したけど、わたしよりも母親が、そういう苦労してると思う。わたしに辛い思いをさせないために、かばってる面も、いっぱいあったから。

Cさんは、父親に生前つらくあたったことを、「いちばん後悔している」。その後悔が、いま、ハンセン病問題の活動にとりくむ原動力のひとつになっているという。

《Cさん》もっと優しくしてやって、もっと近づいて、面倒みてやればよかったって。だからいま、〔父が〕この病気で〔そういうふうに〕亡くなったから、一生懸命、この病気にたいして、頑張って、みんなと一緒に行動したいというふうに考えるんだと思うんです。

### 父親のことを言えないために、仕事を辞め、再婚もせず

Cさんは、60歳を迎えたことを機に、最近になって仕事をやめた。「れんげ草の会」(ハンセン病遺族・家族の会)の活動など、ハンセン病問題をめぐる一連の活動に参加するには、職場の同僚に「ごまかす」必要があり、そのことが、年々つらくなってきたからだ。

《Cさん》年に2回ぐらいしか休まないようにしてたし、休んでも、そのぶんは相手の人にも休ましてたんです、わたしは。それでも、聞かれるんです。「なんなの？ なんて行くの？」って。〔そういうときは〕「うちの父親、もと兵隊に行ってる。もしかしたら兵隊に行って、目が悪くなったんじゃないか。書類上そういうふうにしてやるとお金が出るから〔っていう〕、そういう集まりがあって。わたしも書類を出すと、父親に少しでも恩給が下りるかと思って。そういうので、話を聞きに行くんだ」と言う。そう言って、ごまかして、ずっときたんです。

「そんなに〔時間が〕かかるものか？」って、一緒に働いてる人が聞くんです。そ

う言われると、「国でやることなんて、すぐ決まらない。何年もかかる」って。まあ、ごまかしごまかし。それがだんだん、ごまかすのがつらくなっていく、自分自身。

Cさんにとって、「れんげ草の会」の活動は、職場を「ごまかして」「つらい」思いをしても、参加したいと思う重要なものだ。

《Cさん》「れんげ草の会」の人がたと会うと、すごく心が安らぐんです、わたし。東京での抗議行動、日帰りができるときには、休みが重なると、参加してたんです。そうすると、その人がたと一緒にいると、ものすごく、気持ちが楽になる。そしてまた別れて、職場へ戻ると、ものすごく、なんていうか、気持ちが暗くなって。

その繰り返しで、イライラもするし。こんなしてたってなあ、一生こうして暮らして、暗くなったり明るくなったり。そういう暮らしをして、一生このままで死ぬのかなあと思うと、なんか、悲しくなってきた。そうしてるうちに60歳という年がきて、いま、自分で好きなことして、みんなと一緒に行動して、気持ちを楽にして死んでいったほうがいいんじゃないかなって、考えるようになったんです。それで、やめたんですよ。

《Cさん》〔「れんげ草の会」は〕同じ境遇の人がいるから、なんでも話せる、それがいい。ほんっとに、気持ちが落ち着きます。イライラがなくなる。やっぱり、日常生活のなかで、さみしくなったりすると、いままでのことがいろいろ〔思い返されて〕、どうして私だけ、こういうふうにならなんでしょうか、変なことを考えてしまう。だけど、こうしてみんなと会って話したり、最近は電話のやりとりもけっこうするようになったんですよ。頻繁に。

《Cさん》会社休むたびに、嫌な思いして。「また行くの？」って変な顔されて。「いつになったら、それ決まるの？」って言われる。その内容が話せないために、〔いつ〕決まるっていうことも言えない。だからもう、嫌で嫌で嫌で嫌で。それがひとつのストレスになって、夜は眠れない、イライラする。更年期にかかり、薬を飲まないといれない状態のときがあったんです。うちのなかでも、いろんなことあったりするから、みんな重なって。こうしてもダメだな、と思って。60歳になったのがいいきっかけで、生活が大変だけど、まあどうにかなるだろうって、やめちゃった。

父親のことを「言えない」状況にあるなかで、Cさんは、仕事をやめただけでなく、再婚にも踏み切れないという。

《Cさん》この、ハンセン病の家族がいたってというのは……、なんていうんだろ

うな。楽にならない。なんか、みんながそういう目で見てるんじゃないかっていう、その気持ちが、ずうっと取れないんです。だから、なんべんか再婚しようと思ったこともあるんですけど、最近でもあるんですよ、実際の話。だけど、このハンセン病の、こういう集会に出るためには、やっぱり言わなくちゃならない。それを言うまでには、再婚しようという元気がないんです。言えないんですよ、やっぱり。言って、理解を得るということは、できないね。こんなにも、偏見がなくなるようになって、みんなが運動してくれてるんだけど、言えない、やっぱり。

### 国は家族にも謝罪せよ

聞き取りのさいごに、「国にたいして要求することは、ありますか？」と質問した。

《Cさん》国は、家族にたいしても謝罪をしてもらいたい。なんで、家族には謝罪がないのか。もうずっと思ってるんですよ、それは。

確かに、父親は、体もこういう状態になり、苦しみ、家族にも申し訳ないと思いつながら、50年もあんな、閉じこもって〔療養所の〕中に暮らした。うちにも帰れなかった。病気のひとは、たしかに苦しんで、みんなが。そのぶん、われわれもね……。

わたしがたは、〔療養所に入所した患者さんたちと違って〕同じ立場の人が、まわりにはいないんです。まったく知らない人のなかでいじめられたり、いられなくなったり。死んだ人もいるしね。自殺したり、家族が離れ離れになったりした人も、いっぱいいる。だから、苦しみは、一緒だと思うんです。体の痛みは感じなくても、心の痛みは、家族のほうが……。患者さんは、〔療養所の〕中に入っただけで、もう、みんな同じような人だから、助け合って過ごしていった。だけど、われわれは、誰も助けてくれる人もいないし、話せない。そういう苦しみは、すごく多かったの。その謝罪がまったくない。わたし、「なんで家族には謝罪をしないんですか？」って言いたいです。